

一人ひとりが自立する支援を

平野 朝久

東京学芸大学教育学部助教授

数年前から、最近の若い人たちは指示待ち人間であると言われるようになった。さまざまな方面の知人に聞いてみても、やはり、最近の若者は主体性がないとか、自立していないといって、それを肯定する人たちが多い。

もっとも、年配の人たちが「今の若い者は……」と批判的に言うのは、今はじまったことではない。指示待ちということも、批判的に言われるが、会社に就職したばかりで、その世界に慣れないうちは、自分から進んで何かするということは本来的に難しいことである。したがって、批判しているその人たちも若い頃は、多かれ少なかれそのような傾向があったはずである。

それでも、やはり今の若い人たちは昔の若い人たちと比べて指示待ちの傾向が強いと言われる。では、その若い人たちも、生まれた時からそうだったのだろうか。

幼い子どもたちが、自分をとりまくさまざまなものを自分の意志で次々と探索し、常に何かに注意を向け、何かをやろうとしているのを見れば、人間は、本来、自ら求め、考え、自分で意思決定して行動する存在であることがわかる。それが、どうして指示待ちに変わってしまうのだろうか。

私は、昨年までのおよそ3年間、ある公立幼稚園の前に住んでいたが、時々、そこへ来る子どもとその母親との会話を注意して聞いていた。改めて、母親の「～しなさい」という指示・命令調の言葉が多いのに驚いた。また、「～してはいけません」という言葉も多かった。それらをふりきって自分の意志で行動しつづける子もいたが、母親がその言葉を繰り返す、時にはそれがかん高い叫び声となり、必死になってそれに従わせようとしていた。

子どもがどんなに抵抗しても、最後は母親の言うなりにさせられ、それに素直に従わない時は、厳しくしかられていた。学校でも、教師の指示の多さにうんざりすることがある。

誰だって、その子にとって今そうすることが大事だからと思って、指示をして、それをやらせるのである。確かに、その結果、目の前のことは首尾よく達成できるかもしれないが、そのような関わり方をすることによって、もっと大事なことを失うことにならないだろうか。

人間は、もともと自分のことは自分で考え、決定して行動しようとするのであり、そのような力を持っている。そうした力は、他人の支援を受けながらも、それを発揮する経験を重ねていくことによっていっそう洗練され、向上していく。ところが、指導者としての立場にある人たちは、相手が自分で考え、決定するところを代行してしまい、その結論を指示して、それに従わせ、すみやかに所定の行動をとることを求めようとする。結局、その人が自分の持っている力を発揮し、そのことによってその力をさらに向上させる機会を奪ってしまうのである。

これから新しい課題を学習する人、あるいは新しい仕事に取りかかる人が、自ら考え、判断して行動しようとするれば、すでにそれらについて知っている人やできる人たちから見たら、余計な時間はかかるし、無駄なことや非能率的なことも多いだろう。失敗もつきまとう。本人にとっては、不安もあろう。そうしたことを、本人がいっそう自立し、主体的な人間に育っていく大事な過程として、見守り、支え、励まして、支援していくようにしたい。